

考した本書は、正に書名『東西生薬考』にふさわしい内容となつてゐる。

本書は第一章に「東西伝統医薬の流れ」を据えて概説的導入を示し、ディオスコリデス、プリニウスの両本草書にトリカブト根とサソリとの拮抗関係（両者が保有する強い毒性が一緒に用いると相殺して無毒となる）を記載しているが、これと同様の認識が象形古文学の考証から中国書にも見られるという興味深い指摘もあつて、洋の東西に通ずる著者ならではの学識の一端をのぞかせてくれる。

第二章では、アイスランドゴケからレヴィステイクムに至る七十三種の生薬を五十音順に配し、個々の生薬の効能の東西比較、類似、異同、使用方法等を簡潔な表現で紹介しているが、記述内容は濃く、しかもその範囲は多岐にわたる話題を折り込んでいて、教科書風でないところが、著者の学識の深さと濃厚な人柄を読者に伝えてくれる。

東西本草書の単色図版を関連個所に配するとともに、美麗な図版を持つディオスコリデス『ギリシア本草』の「ウィーン古写本」の複製原色版図版と著者蔵本の中国明代の『本草品彙精要』の世界でも現存数少ない原色図版を多数配して、読者を本来の医療目的を知る東西本草書の世界に導き入れてくれる。

読んで有益な、見て楽しい好書である。

（宗田 一）

（創元社、大阪市北区西天満一―四―二、電話〇六一三六三―二

五三一、平成五年二月、A5判、三二〇頁、定価八〇〇〇円）

森 重孝著『鹿児島島の医学』

琉球というサテライトをもつた薩摩の歴史にはかねてから興味をもっていたが、この度、森重孝先生が『薩摩医人群像』、『鹿児島島の医学史散歩』などについて、『鹿児島島の医学』を出版された。

私は食い入るようにこのサテライトの意味するもの、医学への影響の跡をさがし求めた。このサテライトは文化、科学の上陸地の選択、正確を期す上で大きな力があつたのではないだろうか。

歴代藩主の動き、一七七四年の医育機関の設立、葉草園など大きな影響を与えられているように感じられる。

就中、ペルシヤ、華佗と連動するやに云われる東洋の麻酔術秘法の伝達は興味深いものがある。秘中の秘として潜んでいたかのように察せられるが、その意味は深いものがあるであろう。

サテライトでの知識によるか、単なる地理的条件が主たる理由なのか解らないが、宮崎県と比較するとき、唐人医師の渡来は宮崎県では陸上から県南、都城地方に来ているし、唐人医師としてはこの地方に限局渡来した感がある。しかし、薩摩では殆んど全県全方位とみてよいようである。

南蛮医学、オランダ医学に於いても密なる接点があるよう

だが、誠に羨しいものがある。

また、国内に眼を向けても、本草学はもとより、多数の山脇東洋の門下生、緒方洪庵、華岡青洲等の門人など素晴らしい面々がみえる。これら門人の追跡調査はいかがなものだろうか知りたいたいものである。

牛痘接種に就いては薩摩では今少し早期であつてよいように想えるのだが、私個人は牛痘接種に関しては未だ不明なる個所が「日本的」に存在するように思えて仕方がない。

宮崎でもいろいろ取沙汰されて、問題を抱えているが、本書の前田杏斉の詳細な記録によつて解決しそうである。書籍の有難さ、恩恵をしみじみと感じる。

北海道開拓医官のところで、瀬之口敬介が出てくるが、明治五年彼の手で完成した『独和辞典』が業績から抜けているようである。惜しいことだと思ふ。最近、辞典の複製版が出ており、僭越であるが加えさせて頂きたい。

これらの構築され、貯えられた鹿児島というのか、薩摩の医学の素晴らしさ、価値観を西郷隆盛は知っていたのではないだろうか。私はそんな印象をもつ。

でなければ、あの頃に、あの遠隔の地にW・ウイリスを預り得ただろうか。私はこのような考えをもつ。

W・ウイリスの手になる医学学校へ医学を学ぶため、或いは英語を学ぶためにどれほどの日本人がこの地を集つたことか、恐ろしい人数であらう。

近隣の宮崎県では、明治、大正、昭和初年の宮崎県に於け

る医療の大半を荷負つたのは彼の門下生であると云つて過言ではない。

昭和十二年八十余歳で亡くなつた荻原百々平は最後年近くまで生残つた門下生であろう。荻原は心からウイリスを慕つた一人だが、死の間際、死後分骨してウイリス頌徳碑のそばに埋めて欲しいと言つた人である。遺族はそのようにされたそうであるが、同様な弟子は他には居なかつたものだろうか。西南戦争が始まる三日程前から宮崎町に滞在しているが、このW・ウイリスの滞在を

一、日向へ医学学校を造る下検分
二、野戦病院の下検分

との見方がある。今日、大方は一、を支持している。

(宮崎滞在は、ヒュー・コータツツイ著「ある英人医師の幕末維新」、宮崎県医師会医学会誌に私が投稿したもの、朝日新聞「遠い崖」に詳しい)

それと戦争勃発から横浜へ出発までのW・ウイリスの行動が欲しい。

尤も、都城町に疎開し、帰国に際して産科器械などを残したとする話があり、器械類は昭和十六年までは都城産婆学校が保存していた確証はある。このあたりは薩摩のW・ウイリス研究者にお願いしたいものである。

宮崎県医師会との関係にふれて、鹿児島島の医学に感謝したいことをのべたい。

遠く明治維新早々、明治七年に出来た県仮病院の医員は全

て鹿児島からの赴任であり、W・ウイリスの弟子が殆どである。

宮崎県医師会の中で、医学会が分離されるのは或る事情によるのだが、明治廿九年である。このときから、初めて特別講演が導入されており、この初回講師は田中苗太郎鹿児島県立病院長である。また、総会の相互乗り入れが太平洋戦争中まで続けられ、相互に情報交換が行われている。

野球の試合などもしばしば行われ、その記事が残されている。

鹿児島島の医学に多くの恩恵をうけながら宮崎の医学は発展したと言えそうである。

この種の本には全く見ることのない、医師会のこと、各病院のこと、助看養成のことなど誠に微に入り、細に亘って書かれているのは誠に便利であると思う。

また、特筆すべきは鹿児島大学の紹介ではないだろうか。各教室の変遷、研究テーマ等々種々なことが教えて頂ける。

私は書評のルールを知らない。知らないながら、新しい本にエールを送り得ることが出来ればと思ったからである。『鹿児島島の医学』を読ませて頂き、読みながら、ここで私にも「一口のせて下さい」と書きとどめながら読み終った。

こんなことを書きとどめなくなる、好きな、素晴らしい本だと思ふ。

(田代 逸郎)

(発行・春苑堂出版、鹿児島市中央町一五―二四パークホテル鹿

児島内、電話〇九九二―五一一一〇〇、発売・春苑堂書店、鹿児島市東千石町一―一六、電話〇九九二―二二二―二一三二、平成五年一月発行、四六判、二二五頁、定価一五〇〇円)

田中助一著復刻『能美洞庵略伝』

一、本書の復刻刊行に至る迄の経緯

本書は昭和十六年に著者により自費出版されたもので、半世紀後に、内容を補記して再生されたといえる。今回の発行は郷土史家で愛郷心の強い大儀正夫氏の献身的奉仕により実現したものである。

能美洞庵の遠祖が広島県能美島出身である理由から、大儀氏は郷土先人の顕彰事業の一つとして、復刻の刊行を熱望し、田中先生の快諾を得、追補記事を加え、再び世に現われたのである。本書には防長の地でも余り紹介されていなかった能美一族の業績が田中先生の尽力により明かにされ、その説明資料には毛利公爵家記録を用いられ、先生ならではの研究成果が躍如としている。しかも、それが著者の処女作であり、時と場を超えて、医学のみならず教育・文化面に迄活用されることは、著者の学者冥利につきるといって過言ではあるまい。

二、体裁

四六判上製布版で一四九頁、使用活字は大きく読み易く、写真は追加分を入れて六頁になっている。初版本は極めて入